

## コリント人への手紙第二10章17節 「誇る者は主を誇れ」

### 1A 肉を誇る者たち

#### 1B コリントの偽教師

#### 2B 人が誇るもの

##### 1C 自分の知恵

##### 2C 自分の力

##### 3C 自分の富

### 2A 主を知る誇り

#### 1B 主なる方

##### 1C 地の恵み

##### 2C 地の公正

##### 3C 地の正義

#### 2B 主の喜び

## 本文

コリント人への手紙第二 10 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、コリント第二 9 章まで来ましたが、午後礼拝で、10 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、10 章 17 節に注目します。「**誇る者は主を誇れ。**」

### 1A 肉を誇る者たち

パウロは、コリント第二の手紙で、コリントの人たちのことを誇っていることを書いていました。例えば、テトスをコリントに遣わすにあたって、「7:14 私はテトスに、あなたがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずにすみません。むしろ、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスの前で誇ったことも真実となったのです。」と言っています。けれども、これは、とりもなおさず、愛している中での関係、深い信頼のある中で誇っていることです。神の恵みによって、コリントの人々が信仰によって救われたこと。パウロは、いろいろな問題がコリントの中で起こっていても、あたかも父が娘や息子を誇っているように、誇っていたのです。そういった意味での誇りは、とても大切ですね。親ばかという言葉がありますが、これは良いことです。息子や娘を誇ります。また、自分の故郷のことを誇るであるとか、自分の国、日本を誇ることもすばらしいです。また、霊的には、自分の教会を誇っていることも健全です。愛し、信頼しているからこそ、誇っています。そして、愛し、信頼する他の教会のことも、誇ることはとても良いことです。

けれども、もし、私たちの教会が、自分たちのほうが、他の教会よりも正しいとしたらどうでしょうか？また、他の教会のことを批判して、見下げていたらどうでしょうか？それは、神の恵みによっ

て、今の自分たちがそうなることを忘れており、悪い意味で誇っていることになり  
ます。言い換えれば、「肉を誇っている」ことになります。

### 1B コリントの偽教師

これがコリントの教会において、偽教師が持ち込んでいたものでした。当時、教会は、今の時代  
以上に、主の預言者、教師、使徒と呼ばれる人々が行き来していました。巡回する伝道者のよう  
な人々が多くいました。そうした中に、恵みの福音ではない偽物を持ち込む者たちもいました。コリ  
ントの人々がまだ信仰的に幼いを見て、彼らの肉を刺激し、煽っていました。キリストにつかせ  
るのではなく、人につかせようとしていたのです。パウロは、コリント人への第一の手紙で、人の知  
恵に頼ってはならないことを教え、同じことを語っていました。1章 31 節です、「**「誇る者は主を誇  
れ」と書いてあるとおりになるためです。」**

コリント第二の残り、10 章から 13 章は、これら偽教師、偽使徒たちに対して、パウロが強く対峙  
する内容になっています。コリントにおいて、多くの問題が解決の方向に進んでいました。けれど  
も、これら偽の教師たちに依然として付いている一部の者たち、残党がいます。そこで、彼がまず  
初めに語ったのは、彼らがパウロをことさらに批判することによって、自分自身にコリントの人々を  
引き寄せているという問題です。自分のしていることを、他の人と比較して、いかに自分がすぐれ  
ているかをしているかを誇っている問題を取り扱っています。

### 2B 人が誇るもの

そこでパウロが、コリント第一にも、第二にも引用しているのが、エレミヤ 9 章 24 節です。23 節  
も読んでみたいと思います。「9:23-24 ——【主】はこう言われる——**知恵ある者は自分の知恵を  
誇るな。力ある者は自分の力を誇るな。富ある者は自分の富を誇るな。24 誇る者は、ただ、これ  
を誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは【主】であり、地に恵みと公正と正義を行  
う者であるからだ。まことに、わたしはこれらのことを喜ぶ。——【主】のことば。』」**

私たちにとって、知恵、力、そして富は、自分の安全、安心を得るために欠かせないものです。  
今の、ロシアとウクライナの戦争を見ても、この三つの要素における戦いが、いつも報道されます。  
知恵については、いかに戦略を立てるのか？ 諜報活動は、情報、知識や知恵との戦いです。そし  
て力は、まさに軍事力の世界です。武力によって現状を変更することは断じて許すことはできな  
いと、岸田首相は何度となく非難していましたが、その武力に対して、いかに武器供与によってウク  
ライナを後押しできるのかという議論が盛んに行われています。そして、富です。金がなければ戦  
争はできません。ゆえに、厳しい経済制裁を課すことによって武器を製造できなくさせる、あるいは  
調達できないようにさせるという意図です。

ですから、これらの三つはとつても大切なもの、欠かすことのできないものなのですが、これらが

あるから大丈夫なのだと、主をないがしろにしていたのが、エレミヤの時代のユダヤ人たちでした。エレミヤが、主に対する背きを悔い改めなければいけないと言っていた時に、人々は、いろいろなことを言い始めました。「あなたは、何もこの国の状況について分かっていない。」と言っていたことでしょう。専門知識が足りないかのように話していたでしょう。「何を言っているのだ、我々はエジプトとの外交によって守られているのだ。」と反論する人もいました。そして、「我々には、金がある。金でいくらでも懐柔することができる。」という人もいたことでしょう。けれども、彼らには、バビロンの国がいずれ攻めてくることを知らなかったのです。エレミヤが預言をしていた初めの頃は、アッシリアがわずかに残っていましたから、それと戦うバビロンは自分たちをむしろ守ってくれるだろう、我々の味方だろうとまで思っていたぐらいです。

けれども、バビロンはエルサレムを攻め、そこを破壊し、彼らを捕え移しました。なぜ、ユダヤの中にいるどんな知者もそれを知ることが出来なかったのでしょうか？それは、バビロンを立ち上がらせたのは、主ご自身だからです。主は、ネブカドネツアル王を、ご自身のしもべとまで呼ばれたことがあります。なぜか？イスラエルが、主に背き、偶像を拝み、それに仕え、反逆していたからです。主は、彼らを裁くために、あえてバビロンが力を持つままにさせ、そして攻め取らせるままにさせたのです。つまり、主を恐れ敬うことこそが、実は最も賢い知恵、知識だったということです。

何か、似ているところがありませんか？ロシアがまさか、ウクライナを全面侵攻していくとは、専門家のほとんどが思っていませんでした。その前は、新型コロナがこれほど世界経済と社会を根底から変えてしまうとは、専門家でも想像できませんでした。そして政治家が、どんなに知恵を絞って対処しようとしても、適切な解答が出てきません。第一波の時は、日本が対応の遅さに強い批判がありました。けれども、感染者をかなり抑えている迅速な対応を取った韓国、また中国がありました。けれども、ここ数か月、韓国は世界一、感染者の率が高い国になってしまい、中国は、感染者は少ないのに、厳格なロックダウンで、むしろ餓死者や自殺者が出てくるという有様です。ロシアのウクライナ侵略も、新型コロナも、何を教えているのでしょうか？我々の知恵や力では、どうすることもできないことがあるのだ、ということです。私たちの主が支配者だということです。

### 1C 自分の知恵

私たち個人の生活においても、もちろん、知恵、力、富の三点セットがあります。そして、私たちはそういったところで、自分の肉を誇る過ちを犯します。

知恵について、自分がどれだけ知っているのか、ということで安心感を得ようとしてしまいます。今は、あまりにも情報が溢れています。そこで、自分が知識を得ることで、すべての時間を費やしてしまうこともあります。けれども、今、話したように、この世のどんな学者や知者であっても、知りえないことが現実に起こっているのです。むしろ、知識を得ようとしている中で変な情報をつかまされて、かえっておかしくなってしまいます。または、細かいことにもものすごく精通しているのに、全体

として、ものすごくおかしなこと、誰が見てもおかしなことをしている人たちがいます。パウロが、このように話しました。「ロマ 1:21-23 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」

コリントの教会においては、偽教師たちが、そうした知恵をひけらかしていたことでしょう。何やら、事細かい知識をひけらかして、尤もらしく見せ、人々を惑わしていたと思います。テモテへの手紙に、パウロは、偽教師たちのやっていることを次のように説明しています。「1:4-7 果てしない作り話と系図に心を寄せたりしないように命じなさい。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、神に委ねられた信仰の務めを実現させることにはなりません。5 この命令が目指す目標は、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる愛です。6 ある人たちはこれらのものを見失い、むなしい議論に迷い込み、7 律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、確信をもって主張している事柄についても理解していません。」

### 2C 自分の力

そして、力についても私たちは、骨身に沁みて必要だと感じるでしょう。何か大変なことが起こっている時に、その人に影響力があれば、助けが与えられることがありますね。時には、政治家の力を使うこともあるでしょう。自分に力さえあれば、いろいろなことができるのと思って、そういった力を付けていこうということになります。しかし、力というのは、すぐに腐敗します。力を得ると、自由を手に入れます。そして、自由があると、それを適切に、抑制しながら使っていくことは、とても難しいです。力をもって自由になると、むしろ、自分自身を滅ぼしてしまうことをやってしまいます。自由が自由でなくなるのです。

ホロコーストの映画に、「シンドラーのリスト」という者が出てきます。そこで強制収容所の所長になった、ナチスの親衛隊の男は、自分にちょっとでも気に食わないユダヤ人がいると、その場で銃殺するということをしていました。朝起きると、バルコニーから銃を持って、労働しているユダヤ人を、自分の好きなように殺していくというのをしていたのです。それで、シンドラーは、彼を説得します。「力ある者というのは、むしろ力を行使しない力なんだよ。」つまり、赦すということです。いくらでも相手を殺せても、それでもあえて殺さないという赦しのほうが、力ある者なのだと言われます。その男は、少しだけ赦すことができましたが、また元の木阿弥でありました。

### 3C 自分の富

そして富です。自分のお金さえあれば、と思うことが多々あるでしょう。お金があれば、さぞかし幸せになれるか知れないと思うかもしれません。けれども、ある聖書教師が言っていました、「セレブの人たちのことを、うらやましいと思ったことがない。彼らはとても不幸な生活を送っている

人々の方が多い。」と言います。イエス様は、「ルカ 18:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」と言われました。

## 2A 主を知る誇り

しかし、私たちは、知恵でも、力でも、富でもなく、「24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」とエレミヤは預言するのです。私たちは、知恵というもの、力というもの、そして富というものに、強く惹かれていきそうになるのですが、いやいや、主を知っているということを、自分の内なる誇りとしていきなさいということでもあります。私たちが、どれほど日々、朝ごとに、主を見上げる必要があるのでしょうか？日中の歩みの中で、主を覚えて、何かあっても、そこで祈っていくということが必要なのでしょうか。イエス様は、父なる神に祈られて、主を知る事こそが、永遠のいのちだと言われました。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

## 1B 主なる方

まず、「わたしは【主】であり」と言っています。ここには、理屈がありません。モーセが、神の名前を尋ねられたらどうすればいいですか？と言った時に、「わたしは、わたしはあるというものである。」と言われました。この方が主であるということを認めていく、すべてを支配し、主権を持つておられるということを認めていくのです。これは、私たちにとって難しいことです。なぜなら、自分は今の状況を知りたいと思うからです。だから、箴言の言葉を思い出します。「箴言 3:5-6 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。6 あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」すべてのことにまっすぐ、おられる方です。この主権者を知るので、どんな状況であっても、この方が主であることを知るので。

## 1C 地の恵み

そして、主は、「地に恵み」を行われる方です。自分には理解できないことが起こっていても、主がすべてを支配されていることを知り、そしてこの方が恵みを行われるのだ、ということを知ることです。恵みは、ヘセドというヘブル語です。愛であるとか、恵みであるとか、真実とも訳されています。主を知っている者は、これらのことを人々に行っていくように導かれます。例えば、何か災害が起こった時に、人々がなぜそんなことが起こったのかを議論しているうちに、キリスト者は、そこに人々が主の恵みに触れることを願うのです。

## 2C 地の公正

次に、「公正」を行われる方であることが書かれています。公正とは、裁判の時に使う言葉です。判断する時の物差しです。主は、すべてにおいてえこひいきされる方ではありません(ロマ 2:11)。私たちは、知識や力、富など、肉を誇りにしていれば、必ずえこひいきがあります。どこかにつく、ということを好みます。コリント第一では、ある人はパウロにつき、またある人はペテロにつく、アポ

口につく、ということをやっていました。しかし、キリスト者は、主を知っていることを誇りとしている者は、どのような人であっても、キリストを必要としている人々であり、キリストが死なれるほど愛しておられることを知っています。だから、どちらかに付くということとはできないのです。私は、今、東アジア青年キリスト者大会という、日中韓のキリスト者が集まる大会に関わっています。その時に、キリストが韓国人だけのための主ではないことを知っています。日本だけの主でもないし、中国だけの主ではないのです。日中の関係が悪くなる時に、また日韓の関係が悪くなる時、また中韓の関係が悪い時、私たちはどうすればよいのでしょうか？すべての人に、キリストにあって良くするように召されています。

### 3C 地の正義

そして、主は、「正義を行う者」でられます。正義というのは、元々の意味は「真っ直ぐ」であります。すべてのことが、あるべきところに適切に置かれている状況です。例えば、富がごく一部のみに集中していたら、そこには正義がありません。正義のためには、それを貧しい人々に分かち合う必要があります。そして、人々が神のかたちに造られているのですから、誰かが人を殺したらそれは不義また悪になります。こうやって、神は正しい方であり、この方を知っている者の、義を行っていくのです。そして、私たちは自分自身が義を行うこともありますし、信仰によって人々を義としていく、福音宣教もあります。いろんなことが起こっても、自分たちが見失っていないか？確かめる必要があります。

### 2B 主の喜び

そして、「わたしはこれらのことを喜ぶ。」とエレミヤは言っています。主は、ご自分の恵みを示すこと、公正を示すこと、そして正義を示すことを喜ばれています。私たちが、主を知って、そして、これら主の願われていることを行っている時に、主は喜んでおられるのです。

私たちが、何を誇るべきかが、もうお分かりになったと思います。何を誇っているのかをよくよく、調べてみましょう。そして、私たちがすばらしい主の働きを見る時に、それが主がなされたことなのだ、と、はっきり認めることができます。だれかが、あなたがたはすばらしいですね、と言われても、自分がやっているとは思えないのです。事実、そうでないのですから、主の恵みです、としか言えないのです。これが、誇る者は主を誇れ、ということでもあります。